

環海異聞

三



k 44

富士川文庫



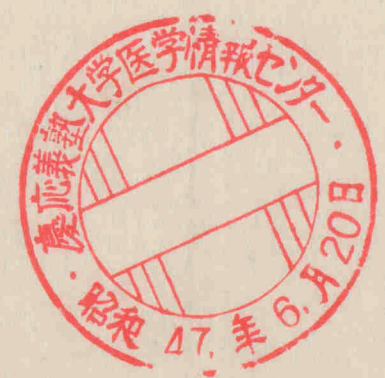
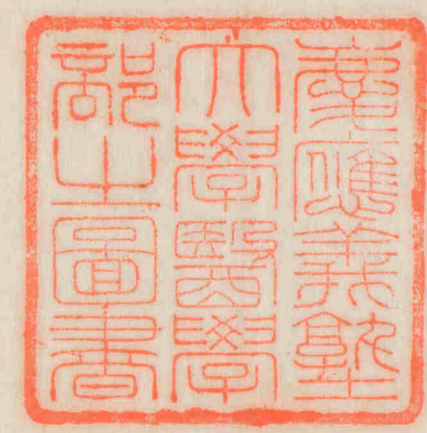
290.9

Ka

3

290.9
K

No. 2518
12 K 44



富士川文庫

166

本三又



漂客紀聞卷之三

ヤコーツカ
運哥都蛤

十月十三日 ヤコーツカ とヤー西へ忌

オホーツカよりけ所まで、五初までは二十日
の元始より、忌の終りまでは如数なり、前
ゆへにあられよお成り五日経て、忌はけり
の夜、殺凡二子、斬殺も、おえへ其家、此乃群
ハ本造りも石、流りも、此屋の、拙りとも、は

丸木より組あけ造り立し家ニ指おくれ宿を
より麦餅牛肉等をあてられきりし

一人家は木造りなり石造りも此等へた
後所と寺をかりけり

家内の姓方ハイルコーツカの前より

一寺ハ九ヶ所此座に

寺の造り松佛殿並ち僧の住子等ハ
イルコーツカの前より

一ヶ所ハ十日余居立に

一節よりしきき来り傷られ是より
腐れしあしきもの商所へ着しゆ
医者やれしきや即料なり住子えり
てその朽ち果の石を掘りし掘き
切りしき入るそれくのきりてし
ききたりし療治校しきえりし
えりしきしきしきしきしきしき
毎度由屋よりとおえりしきしき
の形を仰り幾きしきしきしき

り殺——ヤル者をイルコーツカとて
あゝ名南りヤル

十一月廿四日ヤコーツカとて——イルコー
ツカとてヤル是より大機南の方へ向ひ
て旅り仕ゆ代官ハヤコーツカとてより捕
ともハミ料分そのい殺是仕ゆ

一 道中馬つさハ彼處乃里殺より十里
十二里拾八里二十里廿五里といは
りてふやル所

一 宿々驛場乃名ハ——まは差へヤル
但——オリヨクマとヤ新ハ殺殺三
新殺——代官も在義等も在義
衆はろハヤコーツカ同様とて差へ
ヤル又ケレーゲンといふ地是ヤル
これハオリヨクマよりハ殺殺もあ
寺ハニヶ寺は是ヤルとて差ヤル
所ハイルコーツカより九百里とて
とヤル

一 乃中ハ發見より雪車ニ乗つてゐる
むらせやゆるハ堤場の邊近より
河上或ハハ堤附けやれ

一 げ乃中イルコーワカマて大川
つぎ川筋多くは産ゆけ筋ハ氷厚く
もうつめゆへ太の雪車とるよひ
らせ氷のうと通り仕ゆむすりや
さぬきよるへハかん志き

一 ささのきハ三角うてふせきのきサへ

をほきよめてきらせやゆむてをやく
えより氷のうハ堤地より平らな
ゆへものゆ乃のきゆきやゆ組
堤場乃張よりきを不計りハ堤仕
又川の中より氷りかさありゆて
丘のきよるありき 通りも張
かきさふも有るゆを堤新よてハ
陸をむらせやゆ一筋陸路もオホ
ツカよりヤコーツカマて乃乃中

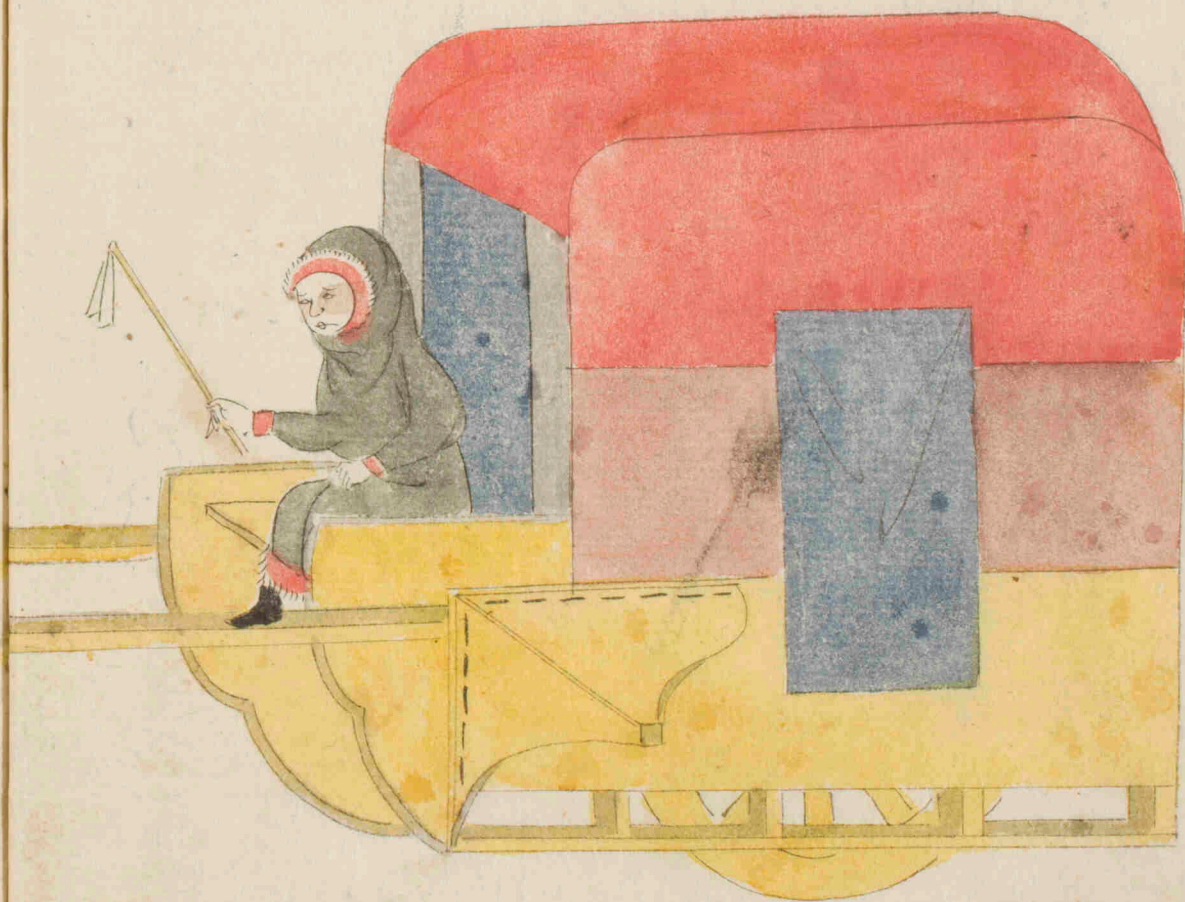
よりハ格別、宜しく此座より入付
しんきるゝ歌をつけ、此の歌止のる乃
歌の唱りしるを方までも、はへ、
そ、き、り、と、その歌は、
引り、け、結、更、け、居、ゆ、く、
や、と、仕、ゆ、
通、滞、る、記

雪車之圖

よりハ格別置——く由座ゆまへハ
せんまゐるゝ歌をつけゑぬねんのもろ
歌の鳴りゆるるをうたうてもけへぬ
そなたよりとさきの歌は 経馬
月々のねん受け居ゆるゝ通ずるに
雲車とて

川氷の上人の身は
おろろろとほそろろ
とさすしるる身

平のきつ腰の掛
しるるふくもあがり
は細きけり穀の
しるるおとろて
しるるもしるる



川氷のふりかへる
 ちりちりといふ
 平のまゝ
 ばはらけと
 うゝめ
 うゝめ



川氷のふりかへる
 ちりちりといふ
 平のまゝ
 ばはらけと
 うゝめ
 うゝめ

一 道中たふふ山くも有るゆはたふふ
とてはおえふふゆはたふふ
續りゆゆふふふふふふふ
かお急の後十日ふふふふふふ
此座ゆ

一 右ゆゆふふ松のふふふふ此座ゆ
のふふふふふふふふふふ
樹木ハ足ふふふふ
ふふふふふふふふ 十五人の者とも

オホーツカをふふふふふふ
ハ俄平ふふふふふふ
中記ふふふふふふ
オホーツカをふふふふ
ゆふふふふふふふ
ふふふふふふふふ

寛政七年乙卯八月十八日 俄々
オホーツカをふふふふ
かふふふ

正月廿四日イルコーツカへ着 辰 翁

寛政八丙辰年五月上旬

大太史

オホーツカお互同年

銀三郎

十月イルコーツカへ着

茂治郎

左平

太十郎

同年七月三日オホ

津太史

ーツカお互同年十二月下

浩花

旬イルコーツカへ着

己く物

吉席治

ヤコーツカニテ
病氣滞ぬ

市五郎

八三郎

氏之助

津太史ヤコーツカオホーツカお互の長オロニア

人それ科そ人又拙きももせ人そ外まは

ムマカタ
る士ヤコーテる於六七是より集りや

辰一七月三日オホーツカお互同年九月

ヤコーツカへ着仕

一 道中一豆の円とうりまで車分ふるを
休ませゆれともあらうり車及も休ゆ

一 一の飼料を布よる尚ハ仕及もま
まうりくそせやゆ害ハ日本のもうそ
人の参りゆ鞍並むまは荷を参ゆる乃
はうけも格別前二図の致し方又此座ゆ
荷よ参ゆ物ハ仕及も食料致すとい
まも牛の皮袋に入れやゆ

荷あハき汰十二夏月程有しゆ荷

るのとうは人よ参せあやゆ別くす

此座ゆ

一 ヤコーワカまでの中よ山く多く者
箱根山あより参るも此座ゆ
筋たしうは定りゆ参りハ参り
も道はき有しゆ参るは参る
若ゆし参りやゆけ筋ハ夏参る
此座ゆ度山谷乃参るは半日参る
も水と渡りゆは此座ゆこれハヤコー

ツカまつての舟より江戸中半を程乃所
と云ふへやうを其後うては張りきえ
高りふ中へ小松立の和山登りてその
中を押受け居りし事も此座に

一 松は日本の松のてきふこれ小松より
 此松は五葉松富士松よりは大本おえ
 へやし二葉の松も此松は

一
山標造陸少江氏 弟長より聖山
迎ふは何と申所柳 似たる

ふつふと草の顔うそ
うそのもろくさ

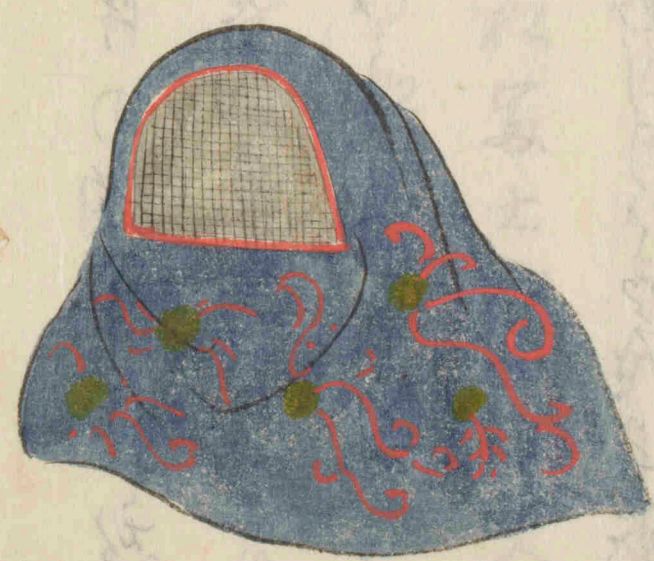
二
城より方々への書状をうけ
る

一故古乃中物
く心所
大丁

かり〜ん ちあ〜ん
 花中 花中
 花中 花中

[illegible]

一 七月頃の道中 仙臺の八九月頃の
 候程より見えし
 一 イルコーツカ道敷の門市西市候程
 氣の病おかしき所 役所より医
 師をきく 療治被しけれし水
 菜等のませ又ある事乃実のこ
 とを物を給ひせしめ
 一 按するは 當実するを
 一 後田所にお建有し病院へ



セイキカ品

物を防くもの

一のもの

一 七月頃の道中 仙臺の八九月頃の

候程より見えし

一 イルコーツカ道敷の門市西市候程

氣の病おかしき所 役所より医

師をきく 療治被しけれし水

菜等のませ又ある事乃実のこ

とを物を給ひせしめ

一 按するは 當実するを

一 後田所にお建有し病院へ

引うろくせ業用おぼさせゆ柳を
も糸り見中の所卯は病人二三十
人もあり居やゆ右市五席よりい
つれもおまきの席まで使はれあふ
まけ所は端ぬく居るゆね道なり
ゆへも養生お計りて同所まで病死
仕ゆ

一 九平やゆ屋中の内イルコーツカを
七百圓も出度ゆとやすまへる才

スコタと中取は度ゆ同所は七八百
円とある地陥るは井戸た中
屋さ池より有る車仕ゆき其水
を汲あげ極より通して釜あり
入れ煮中ゆへに焼くありやゆ
られ山境とやおとある中ゆ茶後乃
現るゆ山境を用ひやゆけ度あり
よりおゆ如座座ゆり湖より煮
ゆ湯と何の器も出されゆ

一 ヤコーツカよりイルコーツカまで二
千五百里あり大川は其のたぬ
れり

伊^{イル}歌^{コー}都^ツ加^カ

寛政八^{丙辰}年正月廿四日 俄多諾普六辰翁三人
お揃ひイルコーツカに参り一里進み其の
役所へ参り此の役所は通詞の者より其の
左邊より其の役所におる所られ此の役所
は其の役所のと町名なり其の役所の

一ヶ月は通詞三百枚宛にお渡され右の通り月々
通詞は其の通り納む所なり

一 三人は一新の同宿仕右町やとて其
時其の通り納む所なり
と申者方其の轉宅同居仕右町新の
役所平其の一人ハ別居へお移り
又その後役所平一人トコロコフ方へお移
り一人乃其の六辰翁にお移り
其の役所へお移り此の役所の

系を結ぶ所十月より大太史根
三節一茂次郎九平太十郎五人惣仕
此等各中合之口人々列くは居中の
その後十二月末津太史清義已の御事
次ハ三節一民助六人惣一都合十人
お掛ひ中此上彼方より何れお談出座
此類より皆一通詞致の者方より一所より
お成同居仕此右通詞致の者居宅ハ三
坪より計りて二坪を掛るは錢一切り

三坪 家内の者住居仕食お掛へ此
ハ別居より出座此お掛へ元二ヶ年程
此在何れもお談の之各別居仕此
お談此より又何れ坪銭有るは此類より

ニコライ 伊勢新島 宅とけトコロコフ

が宅とあるへニタよりれはお成り居此
やうな中酒され一ヶ年をうり右を座
より被り一坪在り又その後自分借宅と
て此在り及言新ひ居此より所お掛

ゆして支うりニタうれは店借神一住
右目雇れとかせきやう

六人一所より受そケ年 張二十
五枚く宿賃の取て無きや

一 又その後南不までの大高草とや老う
衆くともと端途中一厚く目を押
くれゆり有るは度居ちあの人店を
宿ちんは五やさ次僕くくれやの依く
そ店門は二まうれは借宅仕ひ又借く

此度ゆるあは店留いさせ一者も有るは
役平津太史ハ顔へおまの節まで引續
き右の店は無きや

一 辰ノ十月九平草南不へ急急の長より
連れ系ゆ馬を並は役所へ引掛並子取
ま新のあへるおそれ無き知を案は右
合ゆ人おまの人よりせい候く眼の色ハ
悪く一神の容子整うゆて 目本云系
うて何きもへ通無仕ひ候お取束ふやを

り彼等の安は座ゆへに安なるなり
そえはいうの方にて座ゆへと尋
ゆへにその人の安は座ハハハハハハ
は夢乃ひゆゆゆゆハ日本伊勢の
新蔵とゆへに先年漂流船
光太夫とゆへ者一同はけ國へ来り其
後光太夫等ハ帰国し一某ハ此地は海
石ゆへに座ゆへにゆへに始て松子も
おかりゆへにた平ゆへに松子も

去ル年漂流致し衆を安年子年
智別的光太夫とゆへ人オロエヤ船にて
松子の方より送られ帰朝致されゆへ
中崎を江戸海川にて舟りゆへに座ゆへ
けり一通りハ舟りゆへにそえ等舟
られゆへにハ一向者ゆへにゆへに
ゆへに松子石忠候の面会ゆへにゆへに
中一ゆへに松子の舟中ゆへに松子
くお海をこしゆく昆新島同

よて同人宅へ連れ来る家内妻へも手紙
の中右妻何う挨拶有るゆゑ云々
通す事おわりと云ひますり先
忌後——居ゆ低平宮り佐右の所へ来
ゆ

新蔵今の名「ニコライ」パイトル
イチコロテゲノと云ゆ日本文字
師匠の役お佐とめち地の学問承り目々
お初日本字を習の師匠と云ゆ

南村童子の事子六人有るゆ狼耳校
の宛りひきりゆ漂流人ば地は悪
の後ハたきりゆ向とも中ずきき
ゆへもやか増して百枚とれる

何事も^{ミヤゴ}旅へきりゆ良甘流新ゆ
用向お初ゆちの初功して又か増
二面は拾枚と中ずれ玉玉う装束
羅紗^{カブリモノ}冠帽と玉りりゆ

ボーホローナクといふ宮とれりお表

来ハハ使節の忌める後、何て是
とつけたるものなり

且右の友蔵は、（？）新堀堀おまて
もとよりお渡され将へ銀を授け

年々おつるは、将南宮年十二三才

れる所

新堀よりハ南宮年十二三才なるは、妻
の名に空ヤノ・ムニハイオナ男子
二人女子を人生（？）尚新堀中
病死す

後妻とある名ハカチリナ、エキフ
モオナ 年三十とありと見ゆ

一 新堀より日本書いしは、より假名出位
おまゆ様より、此所より、オロエヤ云
紫井、清と書あり、もとより、是へゆ
より、入組ゆ、掛合より、又、おまてへの
書、その乃、おまて、おまて、おまて、
す、それ、おまて、おまて、おまて、

一 日本通詞役者、エコロイワノナ、ト

コロコフといふ人始ハ町内村方にて
間歩の役檢地割と勤めて七十五歳の
宛引ひなりし一先年暫別光太史等
送り来るる起りし時日本通商協定
ヲ行ふ迄たり是ハ五十年をかり
以テ南那田名那の迎より漂流しけ
地の永住しずりし者有り

イルコーツカの墓所ハ竹内徳重と彫
けしる石塔あり又享保十支テ
藏年何

こと彫りたる目や字の石塔も有りけり
の類也按ハ光太史の記ハ田名那の迎
仇井村久助といふものなり又按ハ
南那^{オコッ}田名^{ツハ}竹内徳重と彫
年漂流して彼地へありありとて
由久助とやらんハけ人数の内なる一
竹内ハ事實ハ別ニ有り

其人ハ志すといハ十二歳より拾七歳と
目や何と云ひし事有る後亦捨て

ゆは光おとろえ居ゆの申へ西河より渡
され光太夫送りの船より去る紐去ん子年
松前までありし申なり又日本種子に
て右師通東より子もそ船より去る松前
事なり名をハナリフイナと云へ申
右光太夫帰れり送り届け預りも并
し年帰る乃と太の箱切よりし根に
百枚のきよやすしる依り高所とも
引つき日本西河役より正社者なり

も有し物々向お意な致し居るこ
女帝死去の後け給根渡り方中途より
滞りゆりあるし三年の留る事あり
りし退く三年分一和は千二百枚更
なりといふ事もあり申なり

日本河を渡りし書ありしこれと云
合しし五袖のしつても無對しあれ
ともや振も居振よりて各しききり
ともれり一ツ二ツ中しをけきりたりと

かけく挨拶されハ再々は挨拶入ル
をかりたり——初来哉日本人の
と云とあやうきもは解ゆ——りて
ひいてお解ゆとやうもふ仕ゆとて
新築うて富又合ゆとてなゆ
卯は日本初八年替古ゆ——ゆとや者
ふも合意対仕ゆ——と一向おあ——
ふゆ

尚有る衆教之子新程あり其の在初より三人

ありと夢中本國より二三年並交代す其の
者并是種ふ八百人程有町年安といふ處
そのとゴロニニテといふ人あり寺ハ十三ヶ
寺有ふ——衆徒ハ石造りなり其遠も
交る卯辰巳轉の方又あり山あり海あり
是り——大河あり川あり廣くヤコーウカの
方へ流るげ川極きの時ハ氷のあつて二三人
程もゐるなり二月初より氷とけかり
ゆ時分は川筋より水来蒸——せりて

とやのまはしとくは人の面もえへる程なり
土地の廣さハ凡百里程ありけり
却ペトルブルカまゝ七百里

實ハ六千七百里ありといふ

唐山界まゝ五百里程東北端末の地カミヤ
ツカ

我帳末の地よりハ少くはありオロミヤ
頗る地はききのあひなり

まして六ふ百里程程ありけり
けり

なるトボリツカ及び加山^{カサン}と云ふ東北のオブ

ラーツケロヤコーツカ。オホーツカ。カミヤ

ツカ等の地はなるまで幾千里の程あり

にじり止百里と云ふ程ありハ皆く是れ

一夏と云ふと云ふ程あり

暖氣とも云ふと云ふ程あり

さうりハカ一南へ云ふ地ハ暫くの間

かくのまゝ一夏と云ふと云ふ程あり

ハカハ南と云ふと云ふ程あり

ツケとヤルられハオロニア本領を占めヤル
らあり^{チツキ}土人の種族^{ヒト}として此處に居るハ眼の
色異々^セ身材も矮くオロニアの人相と大に
違ひヤルオロニア人遇てけ迎へたり
^{ミナリ}締りヤル後ハ町並ともオロニア種の人多くお
城に住し由り^{ミナリ}けあるとハ皆オロニア種
の人となりに住し且市中ハ此處の商人
も遠處^{ミナリ}に居る人々ハ近々より入り来り
ゆ土人の者を皆ブラーツケと呼びヤルブ

ラーツケの人ハ甚く其部は此處に居るや志め
られヤルむ言語も苦より多かり此種を愛し
宗名もオロニア一統の宗流として此處に居る
衣被飲食も違ひヤル儀を来ハオロニア
言葉も用ひ来り此種ハ此の衣類も種々
の類をお用ひヤル

南ある十三人の者ハ七年^{ミナリ}遠處に居る
末の年には年同くして吉席次第死致
十三人となりヤルま中へあつりゆり

長く前後仕の依り類分致し取り
ゆるたよお徳ゆけ地のもあしお
知れぬお徳の風俗も推てお
中興とお徳ゆけ

街衢 居室 才一

町小路並に人家の

け地家居のある町は里程より
一里塚あるゆへにこれを知らり彼を乃
里致れりこす是は同

家数三千軒程あり町割ハ横置より町の
間には寺有別は町の名といふものをさうに
寺の名をいふに住所を尋るなり及
狭き七八間度より車三ツあり入るる所
も有る造りハ石屋も有る造りも阿の
石をいふに二階屋なり十三寸ものあきハ皆
石造りなり狭く屋敷の廣狭ハ分限よ
るなりその家の大小ともは住所の表は
菜園ハタケ有り菜菔ダイコン芋等を作りてあり

又ゆへ一軒屋敷までも甚しく廣きうゝとして
家の敷敷は合せて八町小路も廣きなり其乃
町ハ別々ありて青敷より賣る店ともなふ
有なり又永年の新ハ市中の小店まで賣る牛
町ハ卑しきれは有^下留一軒此地の敷敷ハおるき
たる有なり是様町病院敷敷をなるとハ町より
半町よりよりなるれあるなり永持ともハ
秘々の住居とあるあひ賣買の所ハ別々
賣およりり有るハ大店小店ともありて有住居

の本宅より賣の門をへる代敷所は張を
高ひ一帯ハ其の人多くありて秘め賣るなり
江戸の柳屋田日市あると乃類して大店の店
けりり大店ハ石造り小店ハ木造り店
第二番程の番^{ツキ}屋下の所を延路とす

一 石造りの家ハ其の敷敷ハ其の番敷と
ちをとり其の住居の仕切をあるへき
通りは土倉とすゆともいふへき所と皆
深く掘りて其門は石をつめあへて突

かゝる其とはあつたのときとおを流す平
らううてまゝ石をすくへあつたを流
かゝのときとするより殺篇の後地はく
届く程よりすりし時より切り石をまへる也
けし面よりけしを揃へニツはくあへ
つゝのうらふハ外面と家の内面とは向
其あふのうへハ小石の敷をつめて 窠き
ためけのときへ戻くは石ニツツをながして
築あけまゝ程よりありし其ニツ合せ

の石程なる幅と度とこの厚さ尾を戻く
かきふるすり石も尾もをまきあふのうへ
をハイツウエースカといふ 石灰ミツクイのときも
のをきく下尾の上面と上尾の上面とを
粘ネり——とるるく

イツウエースカ 水と和——とこれ粘り
元の生するものなり別は詳す

郭のときへは残りほけまされるものと
すすぬ二階される所ハとき大丸をとり

た——並へ——と板をとり又瓦を敷く
屋すきる——と右の石灰うまのおうて
張りかこめ——と土を二尺計りきま
其とを板——とすなりぬ門柱の間
席は切——の板——とあるの築きまての
——と——て築石の築かあるなりを其
石重き目の字は隔——とあるのす法有り
て土きのべ強をぬきの——と——と——と
それたを——とひうてかこめなりその間

席の仕切は——と次中好——と任せお後た
た人——の務も——とゆるゆへ幾層も有
うて屋根へは瓦を敷く板うすまて
王都の方へ屋根へ瓦を敷けりけ地
てその屋根は——と——と——と製作ある
といふなり

惣体たの——と——と内都よりあつ——と
を張りて土白する張り屋造りとする
其の——と——と張り張りのかを——と

是ハ板硝子と仕たあたるとのすり又
雲母障子もありむと下とも熱板あり
——人々の住居ハ二階あり戸ハ大柵
也——戸組——大柵ハ金へおんむきま
せ——も有りこるハ薪物する竈を附は
薪用と云する所とす又穴蔵も有
焚きか——所ハジム——ヤとして別を
かま——るも有り
下屋と表留とは皆也——戸有り

一 本造りの家ハ土蔵の所とすかめ丸太
と井桐と組こわけたるものなりそ仕方
ハ丸太のまきめの所よりなる丸太とあり
まき溝をたてこの木の丸を交換て
くひ合はれ——或まき——かきまわけ
定まれるまきと——おまきりの所を
内外より白土を塗るより石を同し井
桐と組こわけあるカト廉——ハ隅はあき
あるより柱建はれる家ハ組こきまきこ

お名家の内より成なり間くはそ隅
の所はハイケ江といふおを改くそ修り
るハマス川下地は変瓦をあらへて面乃
内一方は火を焚く竈口を築くやうな
——二面より石うき——築くけあらうとい
てぬりかゝむそ置は修ひく大いあら
とも大横横一百畳二百畳程はす煙が
はる根のええぬるやうなそとこに大牙
お——口を細長くするものなり竈口

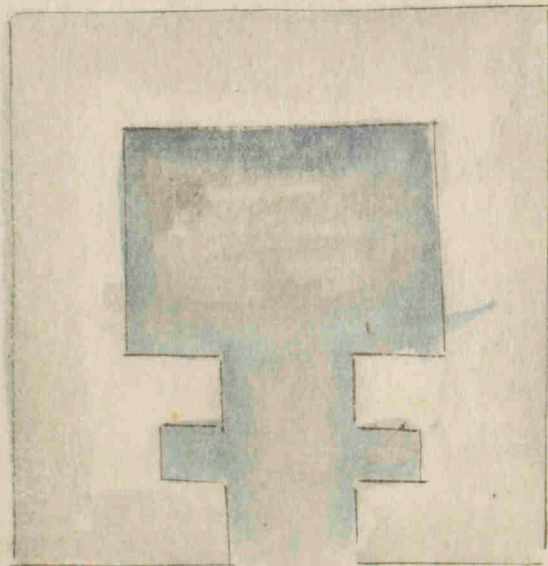
より薪を指入れたきうてこの煙が
より火煙を食へお——拂ふなりそ煙り
お——の中人のえく——せいのかく程のあ
煙りを止める蓋ありたの大煙りをあ
拂ふは程合ありく——そ蓋を——てま
る煙りをとめ其缸の内は薪煙へ
仕どくと扉焚落——をもさうれいとい
のけく——薪の竈口をさうく——この煙が
の口もふたを——てと薪を閉ちふ

さくねり大火をとりたる後けのとき
 煙りを止め内は火氣を包こゆるゆゑ温
 蒸の氣缸の外へそれるや内座敷の
 内は温くその外温暖されるくけ缸
 は七地をふくはる家内をあつめ窓中
 と暖氣のふくむるうねは温けたるもの
 なり座敷毎はせけるすゆは家の内
 高きあつてかゝる鑪半一枚なりて
 暖くシゴト業なりとありある去るる我々

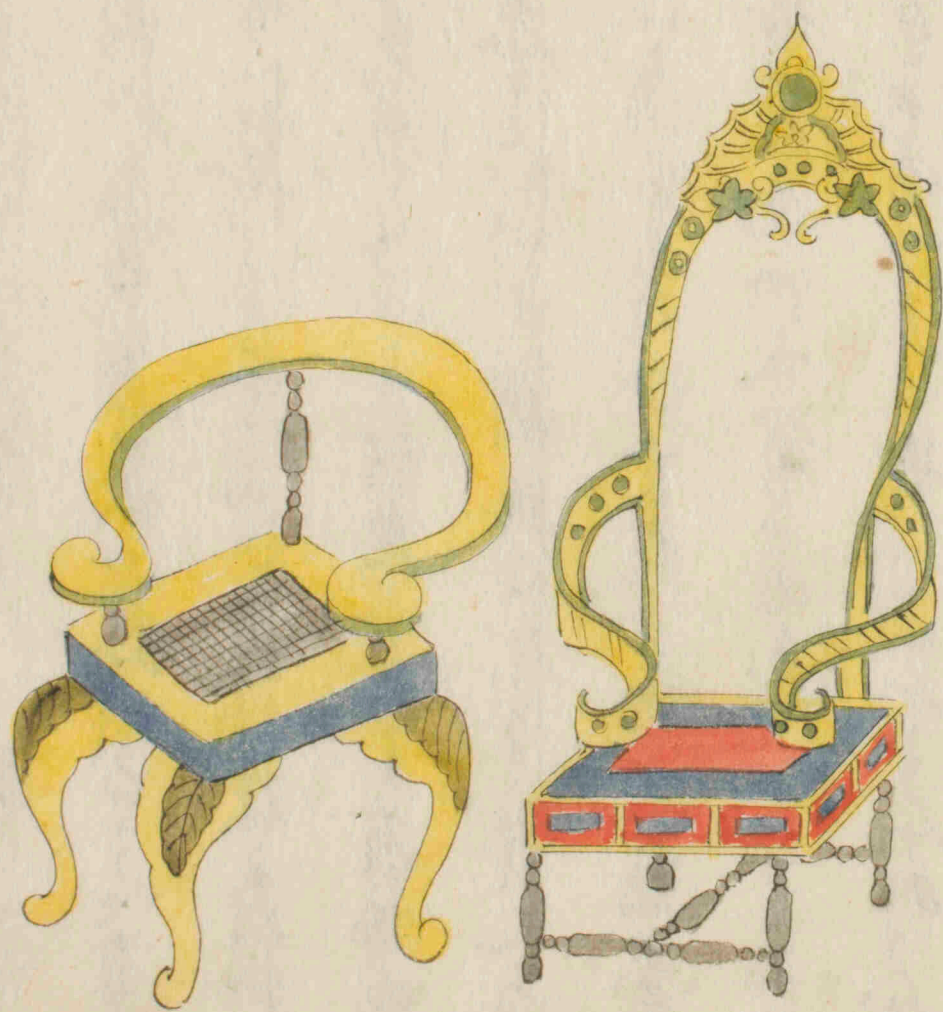
ともにかゝるなり大氣のふくむるゆゑ
 温くあり六月の温氣なり
 ありふくむるなり

ハイチのり地

ハイチ



此の座の
 中
 の
 椅子
 の
 椅子
 の
 椅子



二
 表の
 間
 の
 女
 の
 椅子
 の
 椅子



をあるまへも有之食する飯量も大
小ともいろいろ有り

一 この間のまき木は弘の杉柳等々有り

一 国房^{子トコロ}ハ蔭よりある木は有却床は桐^{トコ}等

とを束ともとりは免すして有木の方に
ハ暖簾をかけ又ぬ板よりして有之床に
きいろいろありなわー皮の蒲等あり
表裏あ面内ハ木の毛を入りてあつ
かるるものなり是ハあふらんぬり枕も

右のトコロ——志と木のやうなるもの
これはいづれもまきで枕とするなりと
よりあるものをもあつてはるあき
のあつてはる精粗さまざまあり

一 廁も二階はあり片陰は用之門の板の
ま中は〇〇あけの穴をあけ至後乃
穴のあへ處を落し用を便する上より
て下る受け筒ありて下の瀾^{セチキ}は落て流す
なりあつてけち地すてハ耕作の地は

使ふといふるあきゆへ葉のひきこ
但一様氣を避るゝゝゝ水屋へ石
灰をふりかくるなり

一 倉廩ハ石造りなり家の作り方と格別
堅るゝりず但一戸あるを丈夫な
ゝといふまでなり家の内ハ穴就多
うれ多くハおを解ある為又改く
あつゝうは夏ハ凍一きゆへは物のいゝまぬ
為なり又凍うてもあつゝうは家内
の

肉肉類又ハ野菜の類を解るゝ肉漬凍
るゝゆへ食物取扱するゝゝ又夏と
ても川ハ解け残りの氷りあつゝうは
薪へ入れゝも腐敗をえず一と思ふ物を
ハたの氷を川より取り来りゝゝ穴薪の早
り一様むなりけひあゝゝゝおを囲む
ゆへ換するゝりぬ

井ハ凍く敷き井うゝとて屋よりとて
あつゝあつゝなり井ハ井板を用ひす氷

を汲むふかき湯をなすり薬の六川を
とて煮す

一 風呂から風呂まで張るの敷は有り
但し住居よりあるれ風呂を建其仕
方ハ内は石を積む敷くその中より火をたき
その石をやうく焼たる附られ冷水をそ
きおろくこれよりて湯張り盛るを
よりこその内は石を盛付け附風呂入口の戸
を閉ッお人々の入浴する所ハ石を盛張る有

板仕切りこれと湯つるを焚湯の氣
こゝは蒸しあるお内を幾重にも棚を
張るその棚の上は人々裸になりて湯を
浴び神をむす能く垢もよれ敷敷もあるを
る之様の小枝の葉付のすくすくを煮込み湯
のこしよりてその内はおく人々これと
とつこ自身はかたを歩つは垢もよ
るあり小桶は冷水を入れ煮て火氣あま
りな垢へうとられおろく顔はそめをそく

くけりお湯水れくあといけ方は同く
ありくお湯をきり又入るなり一月
に度けりたつなりこれハオレキリセヤ
といふ式日のお夜ふめすたそ、夜中
身を清免るけり市中は錢湯も有候し
けりけり但し大勢入りゆゆとて廣
く構へたるまてなり入浴につけざる者ハ
スーく内はけりか

浴室圖



浴する者のやう
棚の家

小桶

桜の葉の
枝の家の

煙る水とて
場をくさす家

